

## 「知の蓄積と活用にむけた方法論的研究」部門 第12回研究会記録

## 震災とアーカイブ

## How should we archive the Great Disaster ?

本特集は、当部門の第12回研究会の報告とディスカッションの記録である。この研究会では、野坂真氏による「東日本大震災後の岩手県津波被災地域におけるアーカイブ活動の経緯と課題：安渡地域アーカイブプロジェクトを中心事例として」報告を材料に、アーカイブを用いた地域の再結合と世代継承、地域の持続可能性について、具体的に検討した。

はじめに、野坂氏から安渡地区での活動に関する詳細な紹介を含めた報告があった。その後、コメンテーター川島秀一氏から、福島県新地町での調査地に暮らしながらの「聞き取り調査」実践の紹介を受けた。そこでは、第一に、被災者・被災地で収集している「災害の記憶」が、災害での経験にとどまらず、亡くなった人々や地域に関する記録、彼ら自身の個人史をも含む点が確認された。第二に、個人を通して歴史・社会をみる民俗学での姿勢において、調査地に住むことのもたらす利点と困難が明示された。さらに、震災前と現在の連結を可能にする現象・事物・関係性が相当数存在すること、つまり「歴史は今につながるものであるべき」という基本姿勢が提示された。

その後、モデレーター中澤秀雄氏から2つの論点が提示され、議論を進めた。第一は、現在にもつながる「結い・ユイ」に着目し、そこに内在する「競い合う文化」と「協同の文化」のバランスをどのようにとるのか、第二に、「津波後は、旅の者に満たされる」という経験知に表される新参者は、どのように津波前の文化を継承するのか、の2点であった。後者については、旅の者が地域の精神性を学ぶ姿勢の重要性が指摘され、それが調査者にもあてはまること、つまり自分の存在をさらして初めて信頼関係が成立することが強調された。さらに第三の論点として、何をどのように記録すべきかというアーカイビング方法論上の課題へとつづき、個人をとおして歴史・社会を記録する民俗学での手法を社会学・人類学での手法と対比させつつ、活発な議論が展開された。

(嶋崎尚子)

◆開催日時：2019年1月31日 18:00~20:15

◆場所：早稲田大学戸山キャンパス 第1会議室

◆主催：早稲田大学総合人文科学研究センター「知の蓄積と活用にむけた方法論的研究」部門

◆プログラム：

報告「東日本大震災後の岩手県津波被災地域におけるアーカイブ活動の経緯と課題：大槌町安渡地域  
アーカイブプロジェクトを中心事例として」(野坂真氏 招聘研究員、早稲田大学文化構想学部助手)

コメンテーター：川島秀一氏 (東北大学災害科学国際研究所)

ディスカッション・モデレーター：中澤秀雄氏 (中央大学)

## 報告

# 東日本大震災後の岩手県津波被災地域における アーカイブ活動の経緯と課題

——大槌町安渡地域アーカイブプロジェクトを中心事例として——

野 坂 真

Archives Projects after the Great East Japan Earthquake Tsunami in Iwate Prefecture:  
In the case on Ando Local Archives Projects, Otsuchi Town

Shin NOZAKA

## 1. はじめに

この報告は、岩手県大槌町において実施され野坂が助言者として関わる、安渡地域アーカイブプロジェクトについて、活動の経緯と内容を紹介するとともに、その特徴を分析することを通じ、東日本大震災後の津波被災地域におけるアーカイブ活動の現状と課題について考察することを目的としている。そもそもなぜ、災害後の地域アーカイブ活動に注目するか。次に挙げる3つの意義が、地域アーカイブ活動にはあると考えられるからである。

第一に、津波被害の特徴に起因するもので、震災前のまちの姿を再現することに寄与するからである。津波被災地域では、震災前のまちの姿を困難になった地域が多い。大槌町は、東日本大震災により、死者・行方不明者1,286名（震災時の人口の8.4%）、倒壊家屋3,717棟（震災時の世帯数の65.3%）という甚大な津波被害を受けた。大槌町では、1984年に『大槌町史 下巻』が発刊されて以降、公的な町史は作られておらず、郷土資料館もなかった。その後、新たな町史を編纂する動きはあったが、その準備が進められているさなかに、東日本大震災が起きている。さらに津波襲来後、3月11日の夕刻から市街地部分（町方）を中心に火災が発生し、一晩中燃え続け、流されてきた家屋や家財、遺体が多く焼失した。そして、引き波によって海へと持って行かれたものも多い（もちろん、それでもなお大量のガレキの中に家財の一部が残っているケースも散見された）。町役場の本庁舎や図書館、多くの地区の公民館が被災し、多くの地域に関する記録が失われた。また、それまで地域活動の裏方的な役割を担ってきた行政関連組織（町役場、商工会など）の職員や地域のリーダー層も多く被災しており、震災前の地域に関する生の記憶も多く失われた。

第二に、第一の意義と関連して、震災前の地域の記録・記憶は、震災後の復興過程における「最低限の了解事項」を考える上で参照点を見出すために重要と言えるからである。大槌町では、震災前の地域の記録・記憶を失った中で始まる、未曾有の大災害からの復興に向けた取り組みは、手探りに近い状態であったことが推察され、特に市街地部分における復興まちづくり方針は、現在でも二転三転し続けている。震災前と震災後とはそもそもまちづくりの前提が変わっており、震災前の地域振興方針は復興を妨げるという意見もあるかも知れない。しかし、地域内の人間関係に限られる地方では、地域内の重要なステークホルダー同士が「最低限の了解事項」を復興過程のどこかの段階で共有していかないと、取り組みが進まなくなることが多い。「最低限の了解事項」には、震災前のステークホルダーたちの経験則がどうしても入り込んでくる。そうした経験則を合理的に説明することは重要である。

第三に、震災後の復興収束期や次の災害への予防期には、地域コミュニティの共通項や災害教訓をもう一度再構築していくことが重要となるからである。震災後には、多くの市町村で仮の生活の長期化による地域コ

コミュニティの変動、その後の恒久住宅への入居にともなう新たな地域コミュニティの構築が大きな課題となっている。また、東日本大震災津波では、ハードによる防災対策の限界が明らかになっており、新たな地域コミュニティを受け皿として、災害教訓をいかに後世に継承し、住民に避難行動とその後の避難生活の具体的なイメージを持って防災意識を維持するかが重要となっている。

このように、津波被災地域アーカイブ活動は、様々な意味で重要な意義を持ちうる活動と言える。そうした問題関心を前提に、災害後の地域アーカイブ活動に注目する。

## 2. 震災前までの地域開発・振興の経緯

取り組み事例を紹介する前に、震災前までの大槌町における地域開発・振興の経緯や震災後の地域復興上の課題を概観することで、安渡地域アーカイブプロジェクトの活動内容が、どの程度震災前のまちの姿が再現できうる取り組みなのかや、震災後の地域復興上の課題にどのように関わりそうか考えるための材料を提示する。

大槌町は、岩手県沿岸南部にあり、2006年時点で土地の88%が森林であって、平地が極めて少ない。図1は、町内各地区のおおよその位置を示している。町方が町内の中心部であり、その東側に位置するのが安渡地区である。国勢調査によれば、町内では1980年に人口のピーク(21,292人)を迎えた後、人口減少と少子高齢化が進んでおり、2010年時点で人口は16,171人、人口に占める65歳以上の人口比率は全国平均に比べ約9%高かった。町は南を釜石市に接しており、かつて基幹産業であった漁業が停滞していく中(15歳以上就業者に占める割合:1975年15%⇒2010年5%)、より多くの就業者が釜石市等県内他市町村へ通勤するようになっていた(同28%⇒34%)。

大槌町における地域開発・振興において注目すべきものは、町方および安渡を中心とした沿岸部での大規模な埋め立てである。埋め立てが始まったのは、戦後の食糧事情改善を目指す国の方針を受け、1951年に県が「第一次漁港整備計画」を策定してからである。大槌町の埋め立て計画は他の漁港と比べても大規模であり、岩手県内15港の平均が5万5030m<sup>3</sup>であるのに対し、大槌港では40万4000m<sup>3</sup>の埋め立てが実施された(岩手県林業水産部漁港課1982)。埋め立て途中にチリ地震津波(1960年)による被害を受けたが、計画に大きな変更はなく埋め立てが進み、1965年からは事業の中で国が漁協から買い上げた土地を、町が買収・造成し、翌年以降、町民(一般、商店、工場)に分譲していった。1970年代からは、埋め立て地での産業施設の整備が、町の地域開発・振興において重要な施策となる。住宅地を確保したことで人口増加が見込まれる町内において、釜石市への通勤以外に町内の産業を育成することが目指されたと考えられる。

しかし、1980年代からは200カイリ規制の確立により漁港の発展が困難になり始める。1990年代後半になると、地方行政の財源が絞られていく中、地域経済の停滞と人口減、少子高齢化が顕在化し、公共投資による大規模なハードの整備を中心とした地域開発から、地域内の資源を用いた持続的な地域振興への転換を町は模索するようになる。1996年策定の「第7次大槌町町勢発展計画」には、「小粒でもキラリと光る素敵な“くに”への出発」というスローガンが示される。そして、様々な地元NPOや地域組織が発足し、1996年に町内で開催された「全国豊かな海づくり記念大会」前後には様々な地域イベントが実施される(第17回全国豊かな海づくり大会大槌町実行委員会1997)。

2000年代からは、小泉政権下で公共投資の削減と、それに連動する市町村合併の推進が求められるようになる。町では2004年1月に、「住民との協働により、身の丈にあった地域の成長」を求めこれまでどおり大槌町としてのまちづくりを継承し(広報おつち、2004年2月号)、「(釜石市と大槌町それぞれの)地が持つ特性を生かしながら連携を深め」る方針を、各地区の住民代表を集めた協議会の議論などを基に採用し、釜石市とは合併しないことを選択した(加藤2010)。その選択をしたことから、

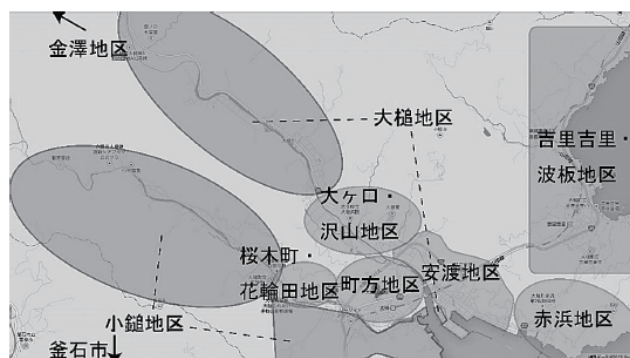


図1 大槌町内各地区のおおよその位置



地方行政の財源をスリム化し持続可能なまちづくりの指針を示すことが喫緊の課題となる（加藤 2010）。そこで、2006年に策定された「第8次町勢発展前期計画」の柱の一つには「協働によるまちづくり」が掲げられており、「ふるさとづくり協働推進事業」により、「町内会や自治会、公共サービスの担い手となるNPO団体、自主防災組織などへの主体的な組織づくり等を支援」（広報おおつち、2009年4月号）している。

安渡地区は、こうした文脈の中で新たな地域組織を形成し活発な活動を行ってきた地区の1つである。例えば、安渡二丁目町内会は1993年に設立され、様々な地域活動を総合的に行っていた。町内会設立前までの安渡地区では、公民館、安渡商店会、伝統芸能集団、婦人会、漁協女性部、消防団、安渡小学校PTA、老人クラブ、保育園といった各領域の地域集団が各々の活動を展開してきたが、様々な地域課題に総合的に対応するために、町内会を立ち上げることとなったという（安渡二丁目町内会 2008）。

このように、産業構造の転換を余儀なくされてからは、歴史や文化活動、地域固有のものを見直しに重点が置かれるようになってきている。そうした歴史・文化的な捉え直しも含めた公共サービスを担う主体として、地元NPOや地域組織の育成が震災前は地域振興の主流として進められていた。安渡地区はそうした地域開発・振興の動きと密接な関係を持っている。こうした経緯の上に震災が起こった。次は、震災後にどのような地域復興上の課題が生じてきているかを見る。

### 3. 震災後の復興過程で生じてきた課題

#### (1) 被害概要と全体的な復興まちづくりの推移

冒頭で述べた通り、大槌町は東日本大震災により甚大な被害を受けた。注目すべきは、地域コミュニティの担い手への被害である。例えば、消防団員は210名中16名（約7%）、婦人消防協力隊員は166名中14名（約8%）、当時町役場庁舎にいた職員は50人中28人（56%）が犠牲になっている。地元事業所にも大きな被害があり、2010年3月11日時点の大槌商工会会員442のうち、387が被災（88%）した。被災した会員のうち、2016年4月1日時点で152が廃業（33%）している。

震災後、2011年5月ころから住民を中心にした復興まちづくりに向けた集会（支援制度の説明会、復興まちづくり方針の検討会など）が町内各地で開催された。その後、8月には津波で亡くなった加藤元町長に代わり、碓川前町長が当選し、復興基本計画策定に向けた動きは加速していく。2011年10～11月の地域復興協議会を経て、12月には災害復興基本計画が策定された。復興基本計画のコンセプトは、「海が見えるつい散歩したくなるこだわりのある『美しいまち』」、まちづくりビジョンには「地域に対するほこりや愛着を大切にすまち」「多様な交流と連携で産業が興る活力あるまち」「地域で町民が寄り添い支え合うコンパクトなまち」等が掲げられ、より具体的な事業として、町外からUターン者や研究者、支援者も関わりながら様々な計画が持ち上がった（碓川 2013）。地道な活動を継続した末に結実しつつある計画ももちろんある。しかしそれと同時に、「鎮魂の森」「MLA構想、メディアコモンズ構想」「大槌をミニシリコンバレーに」「被災した事業所向けの共同商業施設の建設」「駅周辺も含めた一体的な中心市街地形成」「旧役場庁舎の保存」など、町の中心市街地の姿を決める上で比較的重要だったにも関わらず、当初の規模が大幅に縮小したり立ち消えになったりした計画も多い。その背景について、ここでは述べられないが、当事者同士の間ですれ違いが生じてしまったことを現地では耳にする。大槌町に限らず、災害後の被災地域では多かれ少なかれ起こることではある。

#### (2) 仮の生活の長期化と地域コミュニティの変動

住民の生活再建過程については、仮の生活の長期化と地域コミュニティの変動への対応が大きな課題となっている。大槌町では、多くの住民が町内に点在する応急仮設住宅で生活してきた（ピークの2013年1月時点で、町内全世帯数に占める応急仮設住宅入居世帯数の割合38.2%）。応急仮設住宅への入居では、抽選を前提にしつつ、高齢者および障がい者のいる世帯を優先的に入居させており、この時点で一度地域コミュニティは変動を余儀なくされている。その後、2014年から2015年あたりには防災集団移転事業および区画整理事業の工事完了が何度も延長され<sup>(1)</sup>、元の地区での住宅再建を諦める住民、あるいは戻るとしても自力再建を諦め、公営住宅入居へ変更する住民が多数生じてきている（表1）。

災害復興公営住宅は、県内2番目の建設計画戸数(878戸)で、そのほとんどは完成している。しかし、建設が完了した団地では、様々な生活課題を抱え、自分自身の復興の程度が低い住民が多い(図2)。住まいの再建が終わっても、個々の生活再建や心の復興は進んでいないと言える。なお、もっとも多くの入居者が「気になる」とする生活課題は、「団地内での人間関係の希薄さ」である。(野坂ほか 2018)

表1 町内の防災集団移転促進事業、区画整理事業、災害公営住宅整備事業への申し込み戸数の変化(仮申し込み以降の変化)

	防集・区画	公営	全区画数	比較時期
町方・小鍬	-115	25	防集・区画 263、公営 327/ 防集・区画 148、公営 352	2015年3月/ 2015年11月
安渡	-24	14	防集・区画 97、公営 66/ 防集・区画 73、公営 80	2014年11月/ 2015年11月

(野坂 2016)

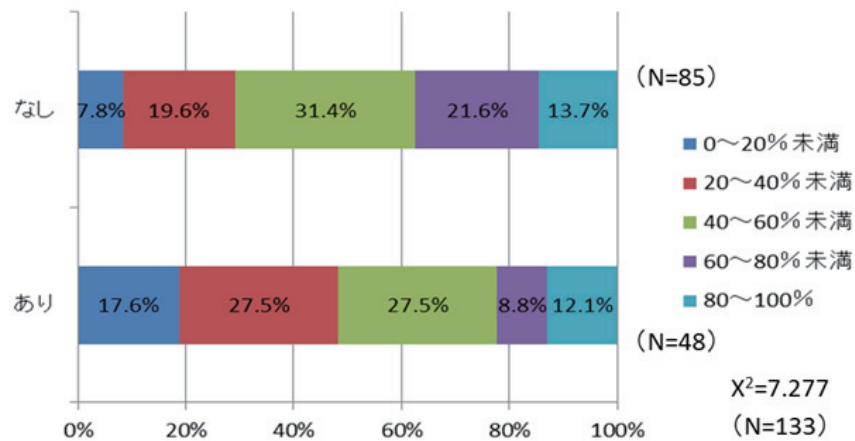


図2 現在の生活で気になることの有無/自分自身の復興の程度(クロス集計)  
(野坂ほか 2018)

安渡地区における住民の生活再建過程でも同様の傾向が見られる。安渡地区では、広大な災害危険区域の設定もあり、居住可能区域が大幅に減少した。地区内に建設できた応急仮設住宅の戸数も、2010年の世帯数745に対し71戸にとどまり、非常に多くの地区住民が地区外で仮の生活を送ることになった。仮の生活が長期化する中、多くの地区住民が地区外や町外に転出した。2017年7月には概算<sup>(2)</sup>で309世帯(41.5%)まで減少する見通しが出ている。他方、地区外で住宅を再建した住民が、地域に通い続けていると推測できる事例も見受けられる<sup>(3)</sup>。また、2017年1月、震災後に閉校となった旧安渡小学校跡地に安渡公民館・避難ホールが完成し、全国的にも最新鋭の防災設備を持った公共施設が供用開始された。復興事業により整備されていく施設等を活用した活動に、地区内外の人々をいかに巻き込めるかが重要となっている。

以上のように、震災前の大槌町における地域開発・振興の経緯と震災後の地域復興上の課題をつなげて見ると、次の3つのことが言える。第一に、震災前の「身の丈のあった地域の成長」を目指すまちづくりを担っていた人材が官民ともに多数亡くなったこと、第二に、震災後、早期から様々な復興事業は行われてきたが、当事者同士の間ですれ違いの中で縮小したり立ち消えになったりした計画も多いこと、第三に、住民の生活再建については、仮の生活が長期化する中で地域コミュニティが変動しており、住まいの再建が終わっても個々の生活再建や心の復興は進んでいないと言えることである。特に安渡地区では、仮の生活が長期化する中、多くの地区住民が地区外や町外に転出しており、今後、復興事業により整備されていく施設等を活用した活動に、地区内外の人々をいかに巻き込みながら、地域コミュニティを再構築していくのが大きな課題となっている。こうした課題に、安渡地域アーカイブプロジェクトがいかに対応しうるか、その可能性を探っていく。

## 4. 安渡地域アーカイブプロジェクトの経緯と現状

### (1) 活動の経緯

現在、安渡地域アーカイブプロジェクトは、安渡町内会のワーキンググループ的な位置づけである安渡地域アーカイブ実行委員会を中心に企画、実施されている。本報告では、実行委員会がどのような経緯で組織され、現在までにどのような活動を展開してきているのかを整理する。

安渡地区では1990年代に町内会が設立された。震災前までは、安渡の1、2、3丁目それぞれに町内会があったが、震災後の2012年4月、仮設住宅への入居に伴い地区住民が分散する中でもコミュニティを維持するため、1、2、3丁目の町内会を合併し、安渡町内会を設立した。この際、「安渡地域に居住する者」としていた従前の町内会への加盟条件に、新たに「元安渡地域に居住を有した者」「安渡町内会の趣旨に賛同する者」を加えた。安渡町内会設立後最初の大きな取り組みは、「なぜ、これほどの被害が出てしまったのか、その検証と防災計画の見直しが必要である」「防災計画づくりを地区内の3つの町内会を統合し設立した安渡町内会での新しいコミュニティ再生の契機としたい」という意識のもと行われた、地区の防災計画の見直しだった。そこで、町内会内に実行委員会形式で、安渡地区防災計画づくり検討会（初代会長：佐藤稲満）を設立し、ほぼ月1回、全16回の検討会が行われた。検討会では、震災時の避難行動や避難所運営の検証を行い、その結果を基に、2013年10月、「安渡地区津波防災計画」が策定された。地区防災計画では、東日本大震災の教訓を次世代に継承するため、震災の教訓・ルールをいかに予防対策に盛り込み、地域住民に啓発・継承し、実効性を高めていけるかが、永遠の課題とされている。そのための具体的な取り組みに、東日本大震災や過去の様々な地域の記憶に基づく「安渡地域アーカイブプロジェクト」の推進が記載されている。このプロジェクトの主旨は、2013年2月、「安渡町内会防災計画づくり検討会」に承認され、その時点からプロジェクトは始まった。まずは、どのような東日本大震災および安渡地域に関連する情報が収集可能なのかを知るため、有志（安渡町内会顧問：煙山佳成）の自宅の一角に「安渡地域アーカイブ室」を設け、資料や証言記録の提供協力を呼びかけた。そこから約5年の間に、6,500点ほどの写真・映像・文書などが収集された。収集を継続しつつ、これらの整理・活用方針を検討し実行するため、2018年1月、それまでに資料提供などで協力してもらっていた地域住民を中心に、安渡町内会会員の有志8名（40歳代～70歳代の男女）から構成される「安渡地域アーカイブ実行委員会」（委員長：佐々木慶一）を立ち上げた。

実行委員会では、2017年度における具体的な活動として「安渡地域アーカイブ展」を企画し、2018年3月、安渡公民館から後援を得て実行した。その後、2019年6月までに、継続して情報収集を行い、電子ファイル数ベースで約7,000点の資料を収集している。そして、その整理と活用方針を検討し、実施している。

情報収集については、地域開発・振興の経緯、被災状況や復興に向けたあゆみ、災害教訓のもととなる経験を裏付ける情報が数多く収集されている。また、震災後に閉校となった旧安渡小学校の物品等に関する情報も収集され、その保存・活用方法に関する検討会が、スピノフ的に立ち上がる契機が生じている。整理としては、分類番号を割り当てた分類表を独自に作り、情報を実行委員が中心となり入力し続けている。活用としては、地区内の安渡公民館を会場に、震災前の地域の姿や震災後の地域のあゆみを写真・映像・文書・証言記録などで振り返る「安渡地域アーカイブ展」を計4回（展示期間は毎回数か月）、地区内の復興事業の現場を地域住民、地域外の参加希望者、行政の担当者とともに見て回る「現地見学会」を1回主催してきた。その他、町内で開催される防災訓練や地域住民が集まるサロンなどにおいて主催団体から依頼を受け、資料を展示したり、資料内容を説明する活動などを行っている。

また、情報の収集・整理・活用の過程において、その情報の意味を委員会内で捉え直す動きも見られる。例えば、旧安渡小学校の卒業制作として作られた卒業生の顔を刻んだレリーフに、住民によっては被災した仲間を忍ぶ意味が付与されるケースが見られた。あるいは、震災前の地域開発・振興の中で行われた事業の様相を物語る写真や文書を見て、なぜそれが成立したのか、地域コミュニティにとっての意義、震災時の防災意識への影響などを考える住民もいた。



## (2) 現在の活動の理念と実行体制

安渡地域アーカイブ実行委員会は、1-2 か月に1度程度不定期に開催される会議にて、東日本大震災前の地域の姿を後世に継承すること、および東日本大震災後の経験と教訓を後世に継承することを目的に、地域および災害に関わる写真、映像、文書、証言記録などの情報を収集・整理・活用する方針を検討し、実行している。

安渡地域アーカイブ実行委員会の活動目的、活動目標、活動方針は、表2の通りである。表2から分かる、安渡地域アーカイブ実行委員会の主な特徴は、次の4点である。

第一に、地域に関わる写真、映像、文書、証言記録などの情報を収集・整理・活用することを目標にしている点である。ここまでに述べた津波被害の特徴とその後の復興過程を踏まえると、そもそも震災前の地域の姿を再現しうる情報を散逸しないよう収集・整理することは重要である。

第二に、震災前の地域に関する情報だけでなく、震災後から現在までの地域の変動過程が分かる情報も収集・整理し、地域の将来を考えることを企図している点である。これは、「地域内の情報の展示スペースの運用方針を検討する。…運用方針について地域の総意をつくる。その後、運用方針を町に提案する」「語り部・現地ガイド等による災害経験の伝承」など、将来の政策提言につながる活動目標から読み取れる。

第三に、特定の構成員への過剰負担を避け、活動の継続が目指されている点である。これは、「活動の継続を目指す。展示などの行事は年に1回など間を空けても良いので、定期的に企画する」「あまり根を詰めすぎない。何かあればお互いに相談する」といった活動方針から読み取れる。

第四に、企画は地域主体で考えることが重視されている点である。これは、「企画は地域主体で考える」「企画には安渡らしさを出す」といった活動方針から読み取れる。

表2 安渡地域アーカイブ実行委員会の活動目的、活動目標、活動方針

目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東日本大震災前の地域の姿を後世に継承する。</li> <li>・東日本大震災後の経験と教訓を後世に継承する。</li> </ul>
目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域および災害に関する情報（写真、映像、文書、証言記録）を収集・整理・活用する方針を検討し、実行する。</li> <li>（例）収集した資料を展示する。</li> <li>・地域内の情報の展示スペースの運用方針を検討する。そのために、展示などで公開し地域の人々に見てもらうことで、運用方針について地域の総意をつくる。その後、運用方針を町に提案する。</li> <li>・語り部・現地ガイド等による災害経験の伝承、地域の歴史や文化、地域・地形等の学習、「地区防災計画」の普及啓発・講義、に関する取り組みを検討する。</li> </ul>
方針	<ul style="list-style-type: none"> <li>・企画は地域主体で考える。</li> <li>・企画には安渡らしさを出す。</li> <li>・活動の継続を目指す。展示などの行事は年に1回など間を空けても良いので、定期的に企画する。</li> <li>・あまり根を詰めすぎない。何かあればお互いに相談する。</li> </ul>

安渡地域アーカイブプロジェクトの実行体制としては、①実行委員会以外にもいくつかの団体や関係者らによって成り立っている。主には、②協力者（地域組織の中心人物や郷土史に詳しい地域住民58名：資料提供、証言記録用のヒアリングへの協力）、③助言者（筆者：会議での助言、ヒアリングの実施や場づくり）、④承認者（安渡町内会役員会、安渡公民館運営委員会：地域の代表組織としてアーカイブ活動方針の承認、公民館における活動方針の承認）、⑤共催・後援者（大槌町：展示など情報発信の場所の提供、大きなイベントの場合の事務局的な補助）、である。また、2018年度以降は、実行委員会で企画提案し、新たな実行組織をスピノフ的に作る動きも出ている。旧安渡小学校の物品等の保存・活用方法に関する検討会もその一例である。この検討会の方針として、旧安渡小学校の物品等の保存・活用方法については、各世代の卒業生の中心人物と連絡を取ることも場合によってはあるとしており、地域外も含めた新たな地域コミュニティの姿を模索する可能性も秘めている。

## 5. 安渡地域アーカイブプロジェクトの特徴—県内の他の活動との暫定的な比較

安渡地域アーカイブプロジェクトの特徴として、次の2点が挙げられる。

第一に、地域の任意団体における実行委員会が主体であるという点である。これにより、①官主体の事業（デジタルアーカイブ、災害記録誌など）、②NPO主体の補助制度を前提とした事業（不特定多数に呼びかける語り部ツアーなど）、③個人主体の取り組み（体験記、語り部講演など）、とは異なる性質を持つ。①官主体の事業と比較すると、大量の情報を開示し「広める」ことを意識し過ぎることで情報の意味が薄まることなく、提供者とのコミュニケーションを重視し、当事者の目線で情報の意味を「深める」ことができる。②NPO主体の事業と比較すると、補助制度にともなう制限（用途や人件費など）を懸念しなくて良いので、手続きが簡略化しやすい。実際、町内会の役員会や総会で方針や計画の承認を得ておけば、具体的な活動内容は、自分たちで決められる。③個人主体の取り組みと比較すると、世代を超えた取り組みとして継続しやすい。個人の取り組みでは、その当事者の活動を継ぐ者が出てこなければ、情報の意味は伝えられず、活動は途絶えてしまう。

第二に、震災アーカイブではなく、「地域」アーカイブであるという点である。各地で震災アーカイブが行われているが、そうした事業や取り組みと比較して、復興事業の完了後も続けることに、地域住民からの違和感が少ないという性質を持つ。従来の復興事業では取り残されがちな、心の復興や地域教育と関連させながら、地域住民が主体となって続けられる。また、震災に限らず、多様なテーマで情報収集ができるので、多様な年齢層、多様な領域（教育や防災だけでなく、文化、産業など）の関係者にも協力を呼びかけやすいという性質も持つ。さらに、災害後に生じてきた課題や事象の背景要因を、災害前までさかのぼって検証する材料を提供できるという性質も持つ。先に紹介した通り、情報の収集・整理・活用の過程で、震災前の地域開発・振興の中で行われた事業の意味を捉え直す契機も生じている。

## 6. おわりに—安渡地域アーカイブプロジェクトからの示唆

本報告では、安渡地域アーカイブプロジェクトについて、活動の経緯と内容を紹介するとともに、その特徴を分析してきた。その中から得られた示唆は次の2つである。

第一に、災害前の地域がいかにか成り立っていたのかを地域住民自身で理解し、地域住民主体の復興（事前復興含め）を行う上で、地域アーカイブ活動は重要な手段となりうるということである。災害復興では、多くの人材が犠牲となった後、多額の資金が急速に投入されることが多い。その中で、「身の丈に合った」地域のあり方を問い直す暇がないまま、復興事業が進んでいく。地域アーカイブ活動は、震災前の地域の姿を再現することで、そうした動きについて地域住民が冷静になって考える契機となるのではないか。

第二に、地域にとっての共通テーマの再発見とコミュニティの結び直しに寄与する可能性があるということである。どこまで実現するか分からないが、閉校となった小学校の物品等の整理をめぐり、町内外の同窓生ネットワークを構築する機運が生じ始めている。また、ヒアリングを通じて、これまで地域活動に関わってきた人々と地域とのつながりも再構築できている。「復興」という地域にとっての共通テーマが終焉時期に差し掛かっている現在、地域アーカイブを通じて新たな共通テーマを再発見し、復興事業の過程で分散し、ときにすれ違いも生じた地域コミュニティを結び直すことは、重要と言える。ただし、地域住民個々人で、過去の経験したことへの評価の仕方が多様であることに注意が必要であり、テーマの焦点を絞りすぎることによって不必要に排除される人がないようにする必要がある。

### 付記

\*本稿は、2019年1月31日に開催された「知の蓄積と活用にむけた方法論的研究」研究部門の研究会において報告した内容を基に加筆・修正し、文章化したものである。

\*この研究の一部は、科学研究費補助金（若手研究）「少子高齢時代における地方の災害復興—復元＝回復力概念の再検討とともに」（研究代表者 野坂真）によって実施されたものである。



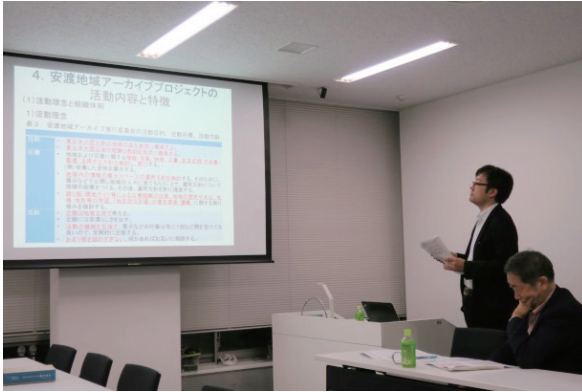
注

- (1) 例えば、読売新聞（2015年10月23日）によれば、2015年6月時点の計画から2か月～10か月遅れが生じている。
- (2) 2015年国勢の世帯数に、防災集団移転促進事業への参加戸数と区画整理事業内の再建住宅および公営住宅の建設予定数（大槌町地域整備課資料より）を加えた。
- (3) 例えば、2014年4月時点の安渡町内会の役員20名のうち、地区内在住者は8名、町内の地区外在住者は10名、町外（釜石市）在住者は2名となっており、町内会役員を中心とする安渡防災検討会では、多くの役員が地区外から通いながら防災上の対応を検討してきた。

参考文献

- 安渡町内会安渡地域アーカイブ実行委員会編、2018、『安渡地域アーカイブ実行委員会活動記録誌（2017年度）』
- 安渡二丁目町内会編、2008、『15周年記念誌「結いの心」を育もう』
- 第17回全国豊かな海づくり大会大槌町実行委員会編、1997、『第17回全国豊かな海づくり大会記録誌 海づくり』
- 碓川豊、2013、『希望の大槌—逆境から発想する町』明石書店
- 岩手県林業水産部漁港課編、1982、『岩手県漁港30年史』
- 加藤宏暉、2010、「未来への約束」、秋道智彌編『大槌の自然、水、人—未来へのメッセージ』pp.256-281、東北出版企画
- 野坂真、2016、「岩手県大槌町における東日本大震災津波前後の災害過程—地域コミュニティ復興からの考察—」『日本都市学会年報』49: 253-261.
- 野坂真・麦倉哲・浅川達人、2018、「災害復興公営住宅入居者における「生活」再建上の諸課題—岩手県大槌町での質問紙調査の結果より」『日本都市学会年報』51: 241-249.

## コメント・ディスカッション



野坂氏による報告



全体討論

**中澤秀雄**：狭くアーカイブ論に止まらず、震災復興や地域社会学としての論点も含まれたお話だったかと思えます。これらの論点は、会場のみならずも興味がおありだと思いますので、のちほどご提起下さい。

まずは、本日スペシャルゲストとしてお呼びしたコメンテーターの川島先生をご紹介したいと思います。私も野坂さんも、震災後気仙沼に通うなかで川島先生の名前を自然に知ることになったのですが、三陸の生き字引というべき方で「歴史のことなら川島先生に聞け」と、地域でたいへん尊敬されています。

お立場としては、気仙沼市史編纂室を経て「リアス・アーク美術館」副館長を務められました。美術館という名前ではありますが、地域の生活文化を展示し活性化することを、大きな使命にしている館です。1994年の開館時には「なんで魚の町に、こんな脈絡のないバブリーな施設を作ったんだ」と批判されましたが、川島先生含めて運営された方々が頑張って、地域の人たちと関係結び、三陸の生活文化を展示に取り入れる中で「こういう施設も地域には必要なんだね」と理解を得てきた歴史があります。現在は「東日本大震災の記録と津波の災害史」という特別展を展開しています。川島先生は、そのあと神奈川大学の日本常民文化研究所に移られました。ご存じのように、渋沢敬三さんが創設した民俗学の最高峰の研究所のひとつですね。現在は、東北大学の「災害科学国際研究所」にご在籍です。民俗学者として先生は、三陸のみならず日本全国を飛び回り、漁業や生活文化に関する聴き取りを丁寧になさっておりまして、安渡についての記述も御本の中に登場します。川島先生は先ほど、「何故私が呼ばれたかわからない」と謙遜されましたが、以上のご経歴を踏まえれば「震災とアーカイブ」というテーマならば、やはり川島先生を置いて他にいらっしゃらないのではないのでしょうか。先生の書かれたこの『津波のまちに生きて』<sup>(1)</sup>というご本ですが、まさに東日本大震災のときリアス・アーク美術館にいらした当事者として辛い思いもされて、震災のあと政府から出てくる机上の計画に対して、非常に強い憤りを表明されていたいらっしゃいます。また山口弥一郎が指摘する、津波のあとでも人は海辺に戻ってしまうという現象の大本にある意味や、津波石碑の意味づけを丁寧にされていて、まさに魂のこもった本として、震災後に気仙沼・三陸に行く者としては、欠かせない書と感じております。

川島先生、野坂さんの発表を聞いて、民俗学者としてのご感想をお話いただければと思います。よろしくお願ひします。

### 津波後に「なくなった地域のこと」を、現地で生活しながら記録する作業

**川島秀一**：野坂さん、どうもありがとうございました。聞いていてですね、いま、私が、どこで、どういうことをしようとしているのかということと、非常に重なるところもあるんで、自分の自己紹介を兼ねて、少しお話ししたいと思います。

(1) 川島秀一 2012『津波のまちに生きて』富山房インターナショナル。

いま、ご紹介していただきました東北大学の災害科学国際研究所は、一応、去年の3月で定年退職しました。しかし、科研費が残っていたんで、ほんとうは足を洗いたかったんですが、いま、シニア研究員（もう少し、いい職名はないかなって思うんですが）、そういうかたちで残っております。3月で辞めるんで、当然、宿舎を出なければならぬことになって、どこで住もうかっていうことになり、ちょうどその頃、福島県の、宮城県境（ケンザカイ）ですなぁ、新地町（シンチマチ：福島県相馬郡新地町）ってところの、ある漁師さんから、声をかけられ、「ここで住まないか」って誘われました。たまたま、住居は空いていて、私は、被災証明書も持っていましたから、比較的安く、借りられることができたということで、そこに決めたわけです。

ひとつは、福島のことを少し敬遠してたかなってというのが、自分のなかにあって、少し住んでみたいと思っただけのことでもあります。だんだん、わかってきたんですけど、その漁師さんがですね、そこは、新地町の釣師浜（ツルシハマ）という浜ですが、安渡と同じようにですね、漁師町であり、かつ、村というより町としても賑やかなところだったんですが、ぜんぶ、津波で、被害に遭って、いまは、そこに住んでる人はおりません。もちろん、災害危険地域になってしまって、広い公園にするというような計画になってるんですが、そういうところで、その漁師さんから、「なくなった地域のことを、書き残してほしい」っていう、それから、もちろん、自分たちのことを書いてほしいっていうのがあります。それから、震災があって、震災を経て、いままで、どういう暮らしをしていったかっていうものも書き残してほしいというような、強い要望を感じました。そういう意味ではアーカイブなのですが、野坂さんの、お仕事っていうのは、ひとつのアーカイブの事業ですよ。でも、私の場合は、個人的な、同じようなアーカイブの作業で、それがなんとなくできそうだったのは、やはり、私は民俗学の出身であって、個人を通して歴史や社会を見るという方法に徹してきたからなんで、その個人の、その漁師さんなら漁師さんのことを描きながら、その住んでいた地域も、同時に書き残すことができるのではないかと、そういった自負があったので、そこに住んでもいいかなっていうふうに思いました。

そこでは、いろいろ現実的にはたいへんでして、まるで調査地に住むということですから、ある種、文化人類学の調査をしているような、そんな感覚がありましたね。たとえば、朝5時半の暗いうちから電話がかかってきて「コーヒー飲みにこないか」とか…。そのような漁師さんときき合いながら、なにかを書き残していく、たぶん、野坂さんとの大きな違いは、個人でやっているってことと、そこに住んでいるってことですね。住民のひとりとして、関わらざるを得ないことが、多々あるということです。最初は、距離のとりかたが難しかったのですが、いまでは慣れてます。さらに、福島県では、試験操業って形で、いま、週に1回か2回しか漁には出ておりません。その新地に住む前からですが、「ウチの船の乗り子（ノリコ）にならないか」って…要するに、船に乗りながら勉強しないかってことですね。週に1回か2回だったら、それはいいかなって感じで、いま、漁船に乗ってます。ただ、今日のような私の仕事があるときは、こちらを優先にしてもらっているのですが、実際、乗って、いろいろわかったことも、ありました。

もうひとつは、いま、関わっていることで、津波の記念碑を、その、釣師浜で建てたいってことだったので、いろいろと検討しているなかで、大槌の安渡の木碑のようなのがいいっていうので、実は、去年の12月2日に、その漁師さんと大工さんを乗せて、安渡に行ってきました。それでですね、近所の人に話を聞いたり、木碑のために4年に1度、替えたりするのがいいってことで、そのように判断したんですね。新地のほうでは、ほんとうに有志の人たちの動きですので、安く作られるなんていうのが一番ですよ。そういった動きがひとつ、あります。

それから、いま一番、彼らが気になっているのが、水産庁が提案して、去年の12月に閣議決定した「水産改革」というものがありますね。非常に、あちこちの漁師さんは反対しております。それは、どうしてかと言うと、漁業権の優先順序を外す改革でして、要するに、いままでは、そこに住んでいる人とか、あるいは、漁協に優先的に漁業権っていうのが与えられたのが、そうではなくなって、知事裁量で決まるということに変える法律です。背景にあるのは、新自由主義であり、それが海まで来たのかっていう感じですね…企業が新規に参入しやすいように変えることです。それで、漠然と不安に感じている漁師さんが全国にいますし、私の親方ですね（私はいま乗り子ですから）も心配して、新聞で見たときに、私のところへ来て、「どういうことなのだ？不安だから、お前ちゃんと勉強しろ」と言われ、その水産改革、漁業法の改革について、少し気になっている



ところでは、そういうわけで、そこに住んでいるっていうことだけで、いろいろなことをしなければならないし、自分は民俗学の立場から、その調査地に対して一定程度の距離感をもたなければならないというような、難しい立場にはいるわけですね。現在、そのように生活をしているってことです。

それで、安渡っていうところでもですね、これは、気仙沼とか、いま、私がいる釣師浜にも共通している点ですが、漁村ではなくて、漁村という核を持ちながら、港町のようなものを形成している。それは、とくに戦後の高度成長期に、目の前の海を埋め立てをして、さらに防潮堤を建て、安心だからということで、埋立地に人を住まわせた。安渡などのリアス式海岸の漁村では、気仙沼に近い発展の仕方と思われます。私もですね、小学生のときは高度成長期でした。それで、どんどん気仙沼湾が埋め立てられていったし、「伸びゆく気仙沼」という標語のもと、そこに工場が建って、商港が開かれて、そういう希望的なことを教え込まれました。私もそう思っていました、その埋め立てしたところが、今回の津波がぜんぶ浸水したところでした、それは気仙沼に限らず、大槌や釜石なども藩政時代（江戸時代）から埋め立てが始まったと思われます。最終的には、高度成長期で完成に近いかたちで埋め立てられたわけですが、東日本大震災の津波ってというのは、江戸時代からの埋め立て地を、ぜんぶ、海が取り戻したという、極端な捉え方をすれば、それまでの、それぞれの町の発展の歴史が否定されたということですね。いつか、海が復讐すると言いますか、埋めたところには、必ず、海が戻ってくるというような考えでなければ、たぶんこれからは都市計画を立ててもダメなのだろうなというふうには思っております。

ところで、安渡というところですが、私は、むかし調査したところは、あくまで、私のなかから見ていたのは、たぶん「漁村」しかなかったと思うのです。漁村としての安渡、それは、いま、ちょっと、反省はしているんですが…そこで聞いた話だとですね、漁船がいっぱい入ってきていて、とくに、日本海側からのイカ釣り船とかが多かったってことも言っていました。もちろん、カツオ船もありましたし、「漁港」でもあったわけです。そのなかで、安渡にある神社、稲荷神社でしたっけ、高台にある神社ですね。あそこに、たとえば、不漁になると、女性たちが、拝殿に籠って祈祷したとかですね、あるいは、病気があると、あそこに集まって祈祷したとか、そんなことも、聞いております。それから、赤浜（アカハマ：岩手県上閉伊郡大槌町赤浜）もそうなんですが、大槌の特徴を漁業から言えば、イルカ漁とかですね、イルカに対する食文化も、けっこう残っていた地域ですね。それは、突きん棒という漁法でした。それが、三陸のなかでは、ちょっと特殊であって、大槌と山田町ですね、どちらかと言うと、その、海の獣って書いて、「海獣（カイジュウ）」って言うんですが、イルカとか、オットセイとかそういった生物を獲っていた地域であるということです。それが、震災で、どうなったのか、イルカの供養碑だけは、震災後、見つけましたけども、いま、どのようになっているのかっていうのが、気がかりなところ。そういった、震災前からのものを、どのようにして、いまにつなげているのかなってことは、実は、私のいる、いまの新地町でも、そういう観点で、気にしております。

### ユイコ（結い子）：「競い合う文化」と「協同の文化」

新地町ってところはですね、そこは、漁船漁業が盛んで、6トンクラスの船が、30艘くらいあったのですが、例の、地震のあとの沖だしをして、ほとんどが助かったらしいです。助かったけれども、原発事故で、漁業はできなくなった。なんのために、船を助けたかわかんないって感じです。最初は、たぶん、安渡などと同じように、瓦礫を海の底から上げる作業をしていたと思うのですが、震災から1年ちょっと過ぎたころに、「試験操業」を開始して、非常に管理された漁業をしているわけです。ところがですね、私が、一緒に、漁に参加なんかしていて、わかったんですが、昨日もそうでしたけども…昨日も、ほんとうは今朝揚げる刺網を、波が荒いんで、朝の5時～6時頃に、電話が来て、「ちょっと手伝ってくれ」と言われて、網から魚をはずす作業を手伝ったのですが、その家族だけでなく、自分の船の水揚げが終わると、周りの船も手伝いにくるわけですね、それを、「ユイコ」（結い子）と言っていました。

ユイコのことは、私もずっと、気になってたのですが、「なんで、ほかの船の手伝いに、私まで行かなくちゃいけないんだろうな」っていう…最初は意外な感じがして、よく覚えています。労働を提供し合うユイコがあった。これは、復興のたぶん支えになったんだらうと思います。だから、決して震災前と震災後は分断された

のではなくて、震災前からあった、そういった社会慣行みたいなものが、結局、復興の一番下支えになっていたということですね。それが、なによりも、一番の発見だったかなと思っています。

それから、残念なことに、この新地の釣師浜ではですね、すぐ高台移転が始まって、散逸するように、数か所に分かれての移転になったわけですね、そこに新しく自分の家を建てた人も多いのですが、バラバラになっているようなのですが、去年の8月13日に盆の迎え火を、それぞれの移転集落で続けておりました。新地の町なかっていうのは、大槌で言えば一番の町の部分にあたるのですが、そこでは、以前から、その迎え火はあまり焚いていないようで町中は暗かったです。迎え火などの、死に関する行事とか儀礼は、まだ残っていてですね、決して、まったく、なくなったわけではないって言う…そういった、むかしといまとがつながる問題、震災前とつながっているのを、見ていく必要があるのではないかっていうことですね。それで、歴史っていうのは、確かに残さなければならぬものなのですが、それは、むかしのことではなくて、やっぱり、それは、いまにつながるものであるって言うこと、いまのために、その歴史っていうのを、要するに、アーカイブっていうのを残していかなければならないって言うのが、たぶん、最近、思っていることです。私も、これから、少し精進して、ある意味、アーカイブの仕事をしていきたいと、思っております。コメントになったかどうか、野坂さんのご発表を聞きながら、自分の、いまの自分を、重ね合わせてお話をさせていただきました。以上です。

**中澤**：ありがとうございます。野坂さん、安渡では、この「ユイコ」（結い子）にあたるのは…

**野坂**：たとえば、水産業の再建のときにそうした動きが見られました。漁船では、エンジンや道具を、自分たちの使いやすいように、マイナーチェンジして使っています。なので、ほかの漁師さんたちと一緒に共同して漁を行うのは、基本的にしないし、口でも「やらない」と言うんですよ。でも、実際には震災後、安渡などでは1つの船にみんなで乗り合わせて、再開したと聞いています。一種の共同行為ですね。あるいは、養殖用のワカメの種も、北海道のほうから取り寄せて、みんなで共有して始めたと聞いています。それは、「ユイコ」（結い子）の、ひとつの形ではないかと思えます。そして、現在も、一緒に仕事をするというのは、続いているように私は見えています。

例えば、2年程前に養殖ワカメの収穫と加工を手伝いに行ったことがあったのですが、見ていると、親戚一同で、あるいは、同業者の漁師さんたちが、陸だけでなく船の上でも手伝います。でも、本人たちは、「みんな個人事業主だから」って言うんですけど、実際は、そうじゃないようです。また、そういった「ユイコ」（結い子）のような文化を、地域全体ではどんどん近代化していつているので、漁業に関わらない住民は継承していないかと思うと、言葉や考え方の端々に、そこから影響受けているケースが結構見られます。例えば、報告の中で出てきた安渡町内会でも、震災後に1、2、3丁目の各町内会が合併するときに、当時の会長佐藤稲満さんは、「結いの心は大事なんだ」って言葉を使うんですね。おそらく、地域としてひとつにまとまっていくって言う発想は、漁業文化から来ていると私は思います。地元の住民の皆さんは、納得されるかどうかわからないんですけど、そうした文化が身体化されて、色々なことが成り立っているのではないかと、大槌に通いながら、感じてはありました。

**中澤**：いまの、お二人のやり取りから、ふたつ論点があるのかなと考えます。漁師同士の助け合いで「ユイ（結い）」というのがあるとお二人指摘されました。しかし一方では、個人事業主としての漁師同士の競い合いと対立があります。無駄に石油を使って、他人より早く漁場に行くというような…先ほどの山口弥一郎ですが、震災のあと高台に住んだ人たちが、何故また海辺に戻ってくるかということ、海辺の人たちの成功に我慢できなくて…

**嶋崎尚子**：よそから入ってきた人がってことですね。

**中澤**：そうです。よそから入ってきた人たちが、海辺に居を構えて、産業的に成功すると、結局、津波で被害を受けた人たちも、我慢できなくなって海辺に戻る。そのような競争という契機も、漁民には非常に強くあるかと思えます。ですから、競争と協同との関係は、歴史的にどのように展開してきたのか、今回の津波をふまえて、どんなバランスで成立するのかという論点が一つ目です。

二つ目の論点は、野坂さんも含めニューカマーたちが、震災前からの文化を受け継いでいけるのかという点

です。この『津波のまちに生きて』のなかで「津波後は、旅の者に満たされる」という三陸の言い伝えが紹介されています。昭和津波のあとは三陸の南のほうから入ってきたニューカマーが家を継ぐ。東日本大震災の場合、大都会から野坂さんのような若い人が三陸に行き、空白を部分的には埋めている。ただ昭和と違って、家を継ぐってことはないでしょうけど… 今回、東日本大震災のあと入ってきた「旅の者」たちは、しかし漁業文化のことは、あまり知らない。お年寄りも津波にかかわらず亡くなっていくなかで、震災前からの記憶・文化を引き継いでいけるのか、これがふたつ目の論点かなと思いますね。この二つの論点について、ご発言があれば…

川島：まず、最初の論点ですね。競争と協同っていう、これは、住んでみてわかった難しい関係なのですね。協同… どちらかと言えば、協同性を持ちながら、競争していくってところがあって、たとえば、船で自分の位置とか、漁のようすを無線で知らせるのですね。知らせ合うことになっているので、それは、ある種、協同操業なのです。船ごとの成果を出すけど、協同する。無線で知らせ合うのですが、本当の友だちには携帯で、情報を知らせる、関係の二重性があるんです。ただの知り合いには知らせない部分もあるのですね。そういう、使い分けをしているのが漁師同士なのですよ。ユイコもそうなのですが、たとえば、網が壊れてしまったときにですね、一緒に漁に行き、すぐ、揚げたときに、いろいろな人が集まって、協同でその日のうちに直してしまう。で、それは、たぶん、いつか、自分も同じ目に遭うから、そのときに、また、助けられるってことがあってというような、協同性でありながら、実は、自分の船のことを考えている… そういったところが、あるのかなというふうに思います。これらは背中合わせですね。

だから、一緒に漁をする意味っていうのは、非常に大事ですし、今回の水産改革だって、それが、今後、船ごとに、漁獲制限とか、生産力向上の指標を与えられて報告するようになると思います。たぶん、一番崩れるのが、こういったユイコとか、協同作業でしょうね… 船ごとに、自分の実績を出し合うってふうになってくるわけですね。研究者の世界は、もう、そのようになってしまっていますけども、それは、ほんとに漁師の世界まで入ってくるというふうに感じています。

### 「津波後は、旅の者に満たされる」

それから、「津波後は旅の者に満たされる」ということですね。災害のあとに、必ず、新しい人が入ってくる。それは、三陸沿岸の特徴ではあるのですが、今回は、それが、都市の人が入ってくるということですが、それが、過去の津波との大きな違いですね。たとえば、山口弥一郎の『津浪と村』<sup>(2)</sup>のなかで、両石（釜石市）で、かなり漁師が亡くなったために、多くの入り婿を集めた例がある。石巻市北上町の十三浜の漁師ですが、それは、すでに津波前から、その漁師たちがイカ釣りで両石に入っていたというかわりがあったから、できたわけですね。

嶋崎：通婚圏ですか。

川島：通婚圏っていうか、出稼ぎです。海を通した出稼ぎをされていて、とくに、かわりが深かったんで、いざ、人が亡くなったときに、そこの区長に当たるような人が、「ここに定着してはどうか」っていう… 津波前のかかわりから定着もしやすかったっていうわけですが、今回は、そういうことはないですよ。いきなり、都市住民とか、研究者とか、NPOとかで入ってきて、そういうことで、そこに根づくってというのは、ほんとうに、個人的な、別な次元と言いますかね…

私は、ぜんぜん違うじゃないかと思えますし、もちろん、漁業をやろうって人も、たぶん、よそからきた人は、過去の津波と比べて少ないのではないかと思えます。

中澤：はい、ありがとうございます。野坂さんから、追加があればお願いします。

野坂：私は、実を言うと、震災後に大槌出身の人と結婚をしたんですが、妻は盛岡に家を購入しているんですね。半分、定着してるような状況で…。旅の者の方々が、東日本大震災の後、研究や支援を行いたいということで、現地に入ってきていると思うんですね。それ自体は良いと思うんです。ただ、そういう方々の中で、助

(2) 山口弥一郎著、石井正巳・川島秀一編、2011『津浪と村（復刻版）』三弥井書店。



成金を得られた、メディアに取り上げられたといった経験を通じ、自分は誰かのために何かしなければならない人間なんだと、本人も気づかないうちに、背負い込んでいくケースも多かった気がします。定着していく人は、基本的には自分のためにやっていて、自分のためにやっていることが、何かのきっかけで人のためになることもあるという発想を持っていることが多いと思うんですよ。

でも、なぜかそれが、逆転してしまっているケースが、地域を見ていてある気がするんです。そうして逆転してしまうと、定着せずに漂流してしまっている。これは、地域にとっても本人にとっても不幸な状態ではないかと。そうなると、地域社会のコーディネーターの役割が、すごく大事ではないかと思っています。先ほどおっしゃられた区長さんのように、地域外から入ってくる人材や知識、技術を、地域の枠組みで理解してローカライズしていくような、コーディネーターが機能するかどうか、非常に大きいと考えます。東日本大震災の津波では、それが機能したかどうかによって、地域ごとの状況が変わる気が、私はしています。過去の津波の場合どうだったのだろうと学んでいくことは、とても大事ではと思いました。

### 地域の精神性と生活文化を学ぶ姿勢

**中澤**：はい、ありがとうございます。私から、もうひとつだけ質問したあと、フロアに投げたいと思います。いまの野坂さんの話の続きで、受け入れてもらうためにコーディネーターが必要という話と同時に、旅の者が、地域の精神性や生活文化を学ぶ姿勢を持っているか、尊重できるかというのも大事という気がします。新地町の漁師さんに「ウチに住みなよ」って言われるような人は、多くはない。川島先生の場合『津波のまちに生きて』の中で、山に入って一瞬海が見えたときに「神様がいてことなんだね」と感想を漏らして漁師に褒められた、受け入れられたという挿話があります。まずは神様とか先祖様とか、彼らが受け継いできたものに対してのリスペクトを、ちゃんと持てるのかどうか。民俗学者として川島先生が「旅の者」たちを見ていて、気になること、学んでほしいことがあれば、教えていただきたいなと思います。

**川島**：漁師さんに限って言えば、元々、漁師さん自身が、移動性のある人間であるので、そういう意味ではですね、おそらく、あちこちの習慣とか文化の違いみたいなもの、たぶん、彼らのなかに、もう、すでに、頭のなかにあるわけですね。だから、「郷に入っては郷に従え」みたいな、そういう感覚っていうのは、元々、持っていたような気がします。それから、「旅働き（タビバタラキ）」とも言うのですが、出稼ぎが、以前は、三陸沿岸もそうだし、いまいる福島県もそうなのだけでも、そこに居て、1年間、漁をできるってことはなかったわけですね。そういうことから、動いて、たとえば、十三浜の者が、漁が活発なときは、岩手県の両石まで行って漁をして暮らしていたっていうような、そういった、元々、移動性がある人たちなので、あまり、動くことに違和感がないって感じですかね… そのために、他の土地に定着することも、逆に抵抗なく受け入れたのじゃないかなってふうに感じていますね。それは、民俗の研究者だって、同じわけですね。このあいだ、久しぶりに、別なところへ行っ、帰って、駅まで迎えに来られたときに、私は天候のことを、話、したんですよ。明日、大丈夫、船に行けるだろうとかかなんとか、いろいろ話をしたら… 「先生も船方（フナカタ）になったな」って… そういうことだと思うのですねえ。そういう、やっぱり、自然に、そういうふうに着していくものを、すでに持っている人たちが漁師ではないかなと思っています。

**中澤**：そこは、近海漁業と遠洋漁業の町の違いという部分は、ありますか。

**川島**：ええ、多少あると思いますけども、そうでなくても、出稼ぎってことは、漁業でなくても、出て行ってましたからね… あまり、自分たちでしか通用しないものがあるっていうことは、逆に、思わないんじゃないのですかね。東京なら東京の生活があるし、こちらとの違いも知っている… そういうふうに、土地を相対的に見られる人っていうのは、やっぱり、どんなところでも、住んでしまうんじゃないかなって、逆に、思ったりします。

**中澤**：ありがとうございます。あと20分ですので、フロアのみなさんからの質問があれば、受け付けたいと思いますけれども、いかがでございましょうか。

## 何をどのように記録するか

品田知美：私、いま、千葉の九十九里浜の近くに住んでまして、6年目ぐらいになってるんですけども、漁民文化について、先生も住んでらっしゃるといことで、いろいろ、教えてほしいんですが。海のほうっていうのは、どうしても、ブラックな側面というか、すぐ、こう、危ない筋とつながってるっていうことが、地元にいるので、ほんとに、ダイレクトに、いろいろ入ってくるんですね。それを、テキストで立証しようと思うと、なかなか、ないんですよ、郷土史とか、いろいろ探ってるんですが。認めにくいけれども、みんな知ってるみたいなことは、たくさんありまして… そういうことっていうのは、この本のなかには、入っているのでしょうか。わりと、こう、いい顔のところだけ見せるとか、いろんな裏があったりとかしますよね…で、具体的には、千葉のほうだと、もう、覚せい剤で、ほんとに、薬中にして、船で働かさせてたとかですね、すごい話をされるんですよ。それは、確実に事実だと思うのは、話をする方の親が漁師だったりするので。ただ、それを、どうやって学術的に、こう、扱うかっていうことで、どんなふうにお考えでしょうか。

川島：いいですか… 私は、とりあえず、ぜんぶ、記録するべきだと思うんです。発表のことを考えなくていいと思いますね。

品田：つまり、聞いたことを具体的に。まず、聞いて準備したほうがいい…。

川島：それはね、いっぱい、私も、耳にするんですよ。密漁のこととか、なんか狡いことをした人の話とか… それは、やはり、発表する、しないは別として、とにかく書き留めておきたいなと思っています。今回の水産改革で、たぶん一番、それがネックになってる… 入ってきますよ、密漁者が、確実に… だから、水産庁では、入ってくることを、もう予想して、罰金を100万くらい上げたのかな、そんな改革後に密漁者が入ってくるのわかってて、実行するっていうこともおかしいのだけでも… そういうことは絶対あると思います。

それから、たとえば、口承文芸の世間話みたいな形のレベルの話でもですね、たとえば、あの家では、むかし、猿を食べたから、だれとだれとだれが死んだとかね、そういう話だってあるわけですよ。でも、それは、やはり、その、その人が、どういう状況で語ったかによるけれども、やはり、ひとつの、これは、歴史って言えば、歴史でしょうね。ただ、発表っていうのは、たいへん難しいとは思いますが、それを、みな、見て見ない振りをするっていうことはできないと思いますね。

嶋崎：先生が、漁師さんから頼まれた件ですが、震災を経てなくなった地域のことを書き残したい、そして自分のことも書き残したいと頼まれた方は、その書き残したものを、どうしてほしいと思っているのでしょうか。個人のものとしてなのでしょうか。

川島：基本的にはね、個人だと思ってますよね。たぶんね… ただ、やはり、その漁師さんは、その地域も好きだと思うので、やっぱり、自分のことを残してもらうことは、その地域のことを残してもらうんだっていう意識は、ぼんやりとはあると思いますね。

嶋崎：どういう形の成果なのでしょう。個人の名前でとか…

川島：自分に対しては、その書きようとか、成果とかっていうことに対しては、もう、こちらに丸投げです。

嶋崎：それは、ほんとに先生との信頼関係があるということですね。

川島：そうですね。だから、自分の70歳までに書けっていうことで…それまでには、なんか、形にはしたいなって思ってます。

嶋崎：それは、やり取りをしながら作品とするのでしょうか、それともすべて、先生に一任されているのでしょうか。

川島：いや、書いたものはぜんぶ読んでもらうつもりです。戻してですね… で、これはマズイとかね、そういうことも、たぶん、出てくると思います。

嶋崎：そういう活動をなさっていると、なかなか出てきにくい、たとえば奥さんの話ですとか、とくに女性の話は、なかなか聞こえてきませんよね。

川島：そうです、出てこないです。

嶋崎：先生に、自分のものも書いてというような要望も出てくるのでしょうか。というのは、先生が、その活動のために住んでいらっしゃることを、どのぐらい、町中（マチジュウ）が、知っているのでしょうか。

川島：いや、皆さん知っています。それで、私も、その人だけでなく、聞き歩いています、やっぱり、あの、女性の方から、仙台のほうに魚を売りに行ったりした体験とか、そういうのは、絶対、必要だと思うので… それから、お姉さんとかなんかに、むかしのことを聞いてますね… で、それで、このあいだの1月11日に、突然とですね、朝に、その集落の知ってる近所の人が、ドアを叩いてですねえ、いまから、「農始め（ノウハジメ）」っていう行事が、田んぼでやるから、写真を撮ったらって言われて… それで、車に乗せられて、行ったんですよ。だから、それは、そこに、私がなぜいるかってこと、みんな、たぶん、知っているっていうことですね。また、それは嬉しいことだし、私も、それは、隠そうとか、そういうことはしないですね。だから、それは、もう、自然に広がりのある部分は、広げていくつもりでいますね。

嶋崎：そうすると、その方の記録だけでなく、派生的に、その地域の民俗史を、先生は、おまとめになれますよね。それを、先生も周りのみなさんも暗黙のうちに期待されているということでしょうか。

川島：そうですね。ただ、ちょっと、たいへんだと思うんだけど、そういうためにいるんだってことは、みなさん、知っています。それは、だけど、非常に難しい問題があって、自分は乗り子として、いま、組合に登録されてるんですけど、1回乗ると、1万2千円もらえるんですよ。そういう、仕事をしているわけですが、その人からは、「カメラを持って乗ってもかまわない」って言われてるんだけど…

嶋崎：「工作中に」っていうことですね。

川島：だから、難しいところはある。でも、それ自体をね、自分はやっぱり、対象にしたいと思ってたんですよ。せっかく、いるのであれば… そのこと自体を問題にしていたほうがいい、というふうに思ってます。それで、たとえば、安い、1匹100円とか80円の魚が、大量にかかることが、実際に、イナダっていうブリの子どもなんですね。それを、網から外すのは、非常に手間取るんですね。私も、やってみただけでも、漁師さんたちが、みんな集まって、1人で10匹とるのに、私は1匹くらいしかとれなくて… もう、手も、ほんとうに、傷だらけになるんですけど… そういう、たいへんなところを、実は、写真を撮りたいんですが、やっぱり、できないですね。だから、そういうこと自体を取りあげていきたいなっていうのは、どこか、心のなかにあります。

嶋崎：純粹に楽しめない部分が、おツライ生活ですね。

川島：だから、むしろ、これ、おカネももらわなくてもいいから、要するに、逆に、おカネを出してまでして、調査しに船に行くって言うと… また、違うんですよ。だけど、記録をしなければ、なんか、乗った意味がないなっていうふうにも思ってた… 難しいけども、それ自体が、ひとつの、なんか、新しいことが見られるから…

嶋崎：方法ですよ。

川島：そうですね。新しい方法ですね。

嶋崎：その活動自体の記録も取っていただきたいですね。すごいことですよ。

中澤：画期的なんでしょうね、調査方法論として。

嶋崎：ほんとうにそうだと思います。

中澤：調査者が、自分の存在が、その地域の人にどういうふうに思われているか…

川島：そう、それ自体がね…

嶋崎：やっぱり、語るべき人、「聞く歴史」としてひとつの作品になっていくと思いますので…

川島：で、親方からは、ちょっと、情報があって、100円ショップで、このくらいのメモ帳で、水に濡れてもインクが消えないのがあるから、それ、買ってこいとか言われて… 言われたとおり、胸ポケットに入れて、何か気づいたときに、メモをとるとかね、ちょっと、調査の入り方としては、変わってますよね… それは、私にとっては、いい体験だと思って、それに従っておりますけど…

嶋崎：すごくおもしろい話だと思いました。

## ノウハウを、どう伝えるか

中澤：今日、よくわかったのは、川島先生は、基本的に個人を単位に考えていらっしゃる。経験も個人を単位



に記録するし、調査者としても個人が単位だと。一方で、次の世代に、ノウハウと経験をどう残すかが、課題にはなると思います。

川島：そうですね…

中澤：そこは、どうしたら伝わるんですか…

川島：それは、でも、生涯、弟子たちも持たないし、秘書もないんだけど、書いたものでしか伝わらないのかなっていうふうに、思ってますね… で、いまのやり方が、ほんとうに、成功するかどうかわかんないし、決していいことだけではないと思いますからね、それは、難しいですよ。

中澤：先生が、いま、おしゃった、そういうふうに自分の存在を晒して、初めて見えてくるっていうか、ことですよ… そここそ大事で、たぶん、地域づくりのうえでも、生きてくる部分なんだろうと思うんですね… この本のなかでも、「唄い込み（ウタイコミ）」の話が出てきますよね。漁師たちが歌を、気仙沼での仕事で、収集しようとして、ひとりじゃ歌えないからって、最初、断られるわけです。ひとりじゃ歌えないって、非常にたくさんの意味があって、もちろん、協同作業の歌だから、ひとりで歌うもんじゃないよってことあれば、それは、結局、陸の神様に聞かせる歌だから…

嶋崎：「やらせではできない」みたいなことなんですね。

中澤：それは、大漁のときに、いい気分だから、自然に出てくるもので…

川島：酒を飲ましてくれるからね…

中澤：そうなんですね、そういう文脈があって初めて、その「唄い込み（ウタイコミ）」が成立するわけで、それを単なる音声としてテープレコーダーに録って残しても、意味が半減する。そういうことを川島先生は、体を張って漁師さんと仲よくなって、気づかされた。それは確かに、同じ土俵でしか、集められない要素なんですよ。活字として残るにしても、伝えることが難しい側面がありますよね。

川島：難しいですよ、ほんとに。それから、ジंकスって言えばなんだけど、やっぱり、俗信の一種でしょうけど、よく、「頼まれた魚は獲れない」っていう諺があって、「いくら獲ってこいよ」って言われると、逆に、獲れない。近くの相馬の市場にいたときには、ある人がですね、ウチでは、軽トラックに、「魚を入れる空のタンクを積んでおくと、あんまり、漁が思わしくないんだ」っていうんですね。それから、その、親方は、氷をいっぱい積んでいくと、魚は獲れないっていう… なにか、そういった、「獲ろうぞ」っていう意思を見せるとですね、逆に、こう…

嶋崎：逃げる…

川島：漁の神様が、与えてくれないっていうようなところがあって、その、氷などは難しいんですが、それから、いろいろ、市場には作戦もあるんです。私が早く行って、たとえば、市場で何番目に魚カゴがあるかっていうことで、競りの値段も違ってくるんですね。で、2、3番目がよくて、あと、だんだん、下がって、また尻上がりに、魚の値がつく。で、早く行って、その、いい場所に、魚カゴを並べておく。その役割をさせられることがあるんです。

嶋崎：そうですか…

川島：試験操業っていうのは、たとえば「混獲（コンカク）」って言って、そのサンプル調査の対象以外の魚が入ると、規約では、海上に放流してくることと書いてあるんですね。で、だれもね、漁師さんは、獲った魚を、捨ててくる人、いません。けども、そういうような、まったく、オカの論理と対立してるところですかですね、そういうところが見えてきます。また、現実には、福島漁師の生活は、東京電力から補償されているんですよ、それが、震災前の5年間の収入の平均を計算して、震災前の収入の約8割は、補償されている。それは、おかしな支給の仕方です、月別なんですね。サラリーみたいに、月別計算している。漁に出なくても、休業補償って、営業補償と同じなのですが、出なくても8割もらえるんですよ。それでも、出たいっていう、その気持ちは、なんなのかなっていうのが、… 私が一番、そこに行って住もうって思った理由なんですけど…

中澤：なんなんでしょうね…

### 「生きられる文化」を記録すること

川島：それは、わからない… そうしなきゃ、確かに、漁業技術は伝わらないですよ。それでも、やはり、獲れなくていいから、海に行っていたいとか、そういう気持ちが、まだ、残ってるし、刺網っていう、非常に地味な漁が、1年数か月はあるんですけども、そうすると、必ず網を入れて、翌朝とか、いまは、試験操業だから、決まってるんです、時間はですね… で、入れた日の晩の、漁師さんの、ニコニコした顔、明日、なにかかっているか、考えると嬉しいっていうような… ああいう感覚などは、やっぱり、一緒に住んでみてしか、わからなかったことですよ。そういう、精神的な面を、どう残すかっていうことが、難しいですね。出来事は残せるかもしれないけど、そこに、どういう気持ちでかかわっていたのかっていう、そこを、どうやって残すかっていうことが、非常に難しいし、いま、一番、そういうことに、気にしている状態ですけどもね…

中澤：野坂さん、無茶振りしますけど、ものごとの意味づけみたいなことを、このアーカイブ事業を通じて、どうやって残すのか。お考えありますか。

野坂：そうですね…大事にしたいことではあります。ただ、具体的にどうやってできるかに関しては、いまのところ、明確な回答はないですね。ただ、漁業の精神文化とは違うのかもしれませんが、地域の人たちにとって、思い入れのあるものについては、それが持つ意味を、2つの方法で記録することができると思います。1つ目は、そのものが持つ意味を、1人だけでの語りであればそれでもいいですし、あるいは、安心して話せる複数人の間で話し合える場を作って、話してもらったのを記録する方法です。2つ目は、言語によらない記録です。分かっているけど言葉では表現できないものをたくさん知っている人はいると思います。そういう人たちの精神みたいなものを、どういうふうに記録するか。漁業文化は、そういうものが非常に多いと思うんですよ。何人か漁師さんに、お話しを伺う機会がありましたけど、多くの方は、「もう、口で説明できないから、今度来い」と言われるんですよ。そして、行って初めて、「ああ、こういうことか」と気づく。そのとき、ひと言も説明してくれません。だけれども、「これが俺たちの説明の仕方なんだ」みたいな感じで教えてくれるんですよ。そうした精神構造で生きている人って、実は漁師さんに限らなくて、浜の人にはそういう人が結構多い気がします。特に、若い人たちに話を聞こうとすると、上手く話せないんですよ。それでもその人たちのことを理解しようとするためには、入口として、彼らが大事にしていることや楽しんでいることを教えてもらって、それを見に行く、それが一番、その人たちにとっても、説明しやすいようにも思うわけです。それは、社会学ではエスノグラフィーに近いと思うんですけど、そうした色々な調査手法を選択できるようにしておくことが大事ではないかということも、もう一回考える必要があるのかなと思いました。

中澤：川島先生、なにかお話しは…

川島：そうですね、やはり、1対1の聞き書き調査っていうのは、限界があるって… だから、民俗学っていうのは、それが、一番の柱ではあるはずですけど、「どうもそれは違ってるな」というのがあってですね、それで、ちょっと、飛び込んだところもあるんですけども、同じ作業をしているときに、こう、ふと耳にするとか… あとは、その地元の人同士が、語っている言葉とか、電話の会話とかで… 絶対、私にはわからなかった言葉とか、あるんですよ。それは、たぶん、聞き書きでは、たぶん、出てこなかった言葉だと思いますね。たとえば、「マワリモノ」、「今日は、マワリモノがなくて…」って、「マワリモノ」ってなんだろうなって思ったら、その、魚の高く売れるものが網にかかる だから、それは、運が回るみたいな、そういう形なんでしょうね… 最初は、なんか、カツオのように、回遊魚のことを言うのかなと思ったら、そうではなくて、運が回って、高く売れるもの、で、ぜんぜん、余計なもの、これは「シタモノ」って言うとか… そういうのは、電話で、漁師さんたちの会話で、初めて、耳にすると、すぐ、こう、突っ込んで、こちらが聞くんですね。聞くことができたわけです。これ、ひとつひとつね、1対1で、面と向かって、聞き書き調査をやっていたら、絶対に出てこなかった言葉だと思います。それは、地元の人の会話だから、自然に出てきたっていう、そういうふうなことがあるんで… いろいろなレベルで、常に調査を、調査をしているような感じですかね… 体験もしながらですけどね…

中澤：たとえば吉里吉里語事典とかあるにはあるけれど。

野坂：大槌に、大砂賀さんって40歳代くらいの地元の人がいて、おもしろい活動をしています。音楽のアー

ティストなんです、地元の言葉で、地元の日常を描く歌を作って歌っていたりするんですね。地元の言葉や日常を知らない人は、なにを言ってるか、全然分からないです。そういった日常の残し方も、1つの方法ですし、とてもおもしろいと私は感じます。研究者として、こうした活動をどう考えたらいいかは分からないのですが、復興が進み完了に近づいてくるにつれて、そうした活動が出てきているようには思います。

中澤：それは地元の人から、そして研究側から、どういう意味があるのか、よろしければご教示いただけませんか…

川島：よく、文化人類学者の川田順造が言っている言葉で「生きられる文化」と「提示される文化」というものがある。「生きられる文化」って、ほんとうに、そのものなだけども、それから、それを、なにか文化財にして、それを残すとかですね、まさしく、私がやっているのも、「提示される文化」かもしれないんだけど、やっぱり、できるだけ、「生きられた文化」に近い形で、記録して、残していくっていうことが、必要なのではないかと思う。民俗学もそうなんだけど、別な形で、文脈から、こう、一人歩きするようなものっていうのは、やはり、もとのことを考えながら提示しないと、ちょっと、違うものになってくるんじゃないかなっていう… それは、ほんとうに、我々自身もそうなんですね… 記録して残すってこと自体が、一人歩きしてしまうこともあるみたい… そこは、十分、注意しなければならないと思うし、私は、残せなくてもいいかなと思うときも、確かにあるんです。写真を撮りそこねてもね、それはそれで、逆に、意味があることではないかと思って、残せなかったら残せなかった、それも、やっぱり意味があると思うし… それは、あんまり、だんだん、気にしなくなったっていうのは、いまの現状から、ちょっと、思いますね。あんまり無理して、すべてを残そうなんて、なんか、強迫症にならなくてもいいと思うんで… そういう、なんか自分でしか見られないことが見ることができれば、それでいいかなっていうふうに、いまは思っています。

中澤：そこは、達人の境地のような…

嶋崎：最後の「残せないこと自体が意味がある」というのは、ほんとうに…

中澤：ただ、私とか野坂さんのような若い世代は、「提示される文化」を、もう少し頑張らなければいけない局面に、今いるのかなとも感じます。川島先生の部下だった、リアス・アーク美術館の山内宏泰さんが『まるかじり気仙沼ガイドブック』<sup>(3)</sup>という本を書いてらっしゃる。船の構造、漁の方法、魚の種類と食べ方等、充実した本なんですけど、彼がその本を作った理由は、気仙沼の子どもたちが、「気仙沼にはなにもない」「気仙沼には、トイザラスがない」って言って、出て行くから。「なにもないわけじゃないか」、こんなに豊かな文化があるのに。ですので、子どもとお年寄りの間をつなぐ世代が、豊かな伝承文化を子どもたちに提示しないと、都会に引き寄せられていくばかり。野坂さん、このアーカイブも、どのように子どもたちに提示しているのか。大事な論点と感じます。

### 「当事者の精神性・文化の両義性」の記録

山田真茂留：ちょっと、いいですか。山田といいます。当事者の精神的な文化とか、それへのリスペクトということに関わる問題なのですが…。野坂さん自身、町内会のメンバーということで当事者性が相当におありかと思えます。そこで野坂さんにお聞きしたいのは、「すり合わせ」って言い方を何度かしていたと思うんですけど、それはどのようにあるべきなんでしょうか。大槌だけでなく、いろんなケースで出てくると思うんです。たとえば震災遺構として庁舎を残すべきとか、これを解体したほうがいいのか、当事者間でも思いはさまざまです。当該の文化へのリスペクトっていうのが大事というのはよくわかりますが、その文化ってひとつの確固たる実体としてあるものなののでしょうか。きょうのご発表とか、その後の議論などを聞いていると、たぶん、ひとつじゃない多様な現実を、あるいはさまざまなその解釈を、それでも、丸ごと記録していこうってことをやろうとしているのかな、という印象を受けます。凄腕の古典的な人類学者がフィールドを見るときは、それを上手にひとつのものとして記録していくということになるのでしょうか…。しかし、たぶん、ここで私たちが見ている現実には、もう本当にいろいろな人がいるわけだし、政治的にもさまざまなことがあります。

(3) 気仙沼商工会議所 2013『まるかじり気仙沼ガイドブック（復刻版）』。



それを、その多様な様相が混在したまま、コンフリクトが噴出したままで示すのか、あるいはある程度の「すり合わせ」をした後のものを出していくのか…。提示の仕方にもいろいろあるかと思います。

きちんとした質問の形になっていなくて恐縮ですが、そのあたりはいかがでしょう。当該の文化ないし精神性へのリスペクトは大事なわけですが、そのリスペクトの仕方が当事者たちの間ですら違っていたり、あるいは対立していたりしたら、どうすればいいのでしょうか。そういったコンフリクトの場面は深いレベルでも浅いレベルでもたくさんあるかと思いますが、これに関して何かお考えがありますでしょうか。

**野坂**：結論から言いますと、都会だったら、別にすり合わせなくてもいいと、私は思います。いろんな人がいるよねということだけで、地域が回っていくと思うんです。でも、地方の、とくに過疎が進む地域では、完全にはできなくても良いのですが、ある程度のすり合わせは、どこかで行わないと、地域そのものが、成り立たなくなるのではないかと思うんです。ネガティブな見方をすれば、狭くて窮屈な地域だということになるかもしれないけれども、でも、そうしないと、回らないような場所なんだと思います。なので、すり合わせしていく過程を、記録に残しておくことが大事なかなと思います。それで、記録したものを公開はできないと思うんですけど、当事者同士が、「あのとき、こうだったよね」と、あとで見れるようにしておくことは、お互いに納得するうえでも、すごく大事なことになるでしょう。

同時に、多様な見方をある程度許容していく必要はあると思います。全部ひとつにすり合わせる必要はなくて、どうしても折り合わなくても、最低限の共通項は見つけて、上手く落ち着くような感じに持っていくのが、必要なかなと。それは、都会の発想からすると、ものすごく労力のかかることで、「なんで、そんなことが必要なんだ」って話になるかもしれないんですけど、その地域に定着して、文化を大事にする、そういうことでもあるかなと私は考えます。

**山田**：続けて、あとひとつですが、いま言われたことってというのは、どっちかって言うと当事者実践のレベルの話ということでしょうか。つまりは社会学者が行う観察記録ということではなく…。あるいは実践が一番で、社会学的観察は二次的、三次的という感じでしょうか。

**野坂**：そうですね…実践のほうが強くなってしまいう面があります。

**山田**：その意味でアーカイブ自体は、やっぱり町のためにこそってというのが一番大事でしょうか。

**嶋崎**：究極な、アーカイブの問題点ですよ。

**中澤**：何のため、誰のためとかね…

**野坂**：研究と同時に実践も必要な理由としては、対象地域が潰れられては困るところもある気がします。対象地域が、研究で入ってる途中とか、研究成果を出した直後に、とんでもない状態になってしまったら、その研究には何の意味があるんだと言われかねないので。もちろん、そうしたケースに出くわした場合でも、上手くいかなかった実態や原因分析をするような描き方もできなくはないと思うんですけど…。

**嶋崎**：やはり、収集・整理して、保存して活用するっていう段階を、すごく意識して、やっていくしかないんだと思います。収集のところは、ほんとうに労多くして、極めて意識的にやっておかないといけない。時代効果が、ものすごくありますから。あとから転換したとき、どうしようもなくなりますから。やっぱり、そこでやるしかないんじゃないですかね。アーカイブのプロセスを、ものすごく意識して…

**中澤**：空間とおカネの共有ですかね…

**嶋崎**：そうです…

**中澤**：空間とおカネと労力の共有…

**嶋崎**：難しい、いや、ほんとうに、難しいことだと思いますね… それこそ、炭鉱で労組の活動家の記録をまとめても、まったく、同意してもらえなかったりするわけですしね…

**中澤**：そうですね、記録、作っておいてね… 「やっぱり、発表しないでほしい」みたいなこと言われてね…

**嶋崎**：ええ、でも、材料としては、絶対、それを残しておかなきゃいけないわけですし。当事者性っていうのは、それぞれの水準での当事者性があるから…

**品田**：そのときって、やっぱり、研究者が最初から、調査者として入っているっていうときも、ある種、リスペクトしなければいけないっていう、ある枠組みがありますね。お聞きしたいと思ったんですけども、その

ときに、やはり、記憶が美化されやすいつてことを、どうやって、こう担保すればいいのか。やっぱり、これが残ったときに、あとから、褒めてしまうんじゃないかってことが、すごく気にかかっています。私は、いま現在調査者として入ってないので、逆に、ほんとうの、ある海辺の住人の一員になっちゃってるのかなと、さっき、気づいたんですけど。そこは、だいぶ違ってるように、伺いました。

**松前もゆる**：すみません、ひと言。文化人類学をやっています、松前と申します。実は、3月まで岩手におりましたので、それで、今日、興味を持って聞かせていただこうと思ったのですが、調査法の議論になるとは、ぜんぜん思っていなくてですね、いま、すごく、なにか言わなきゃいけないんじゃないかってプレッシャーを感じながら聞いていたんですけど…。 なんとというか、アーカイブのことをやっていらっしゃる方って、文化人類学から見ると、すごく使命を帯びて、やってらっしゃるといふうに、私は、勝手に思っていて、逆に言えば、この場で、調査法の話になるってということ自体が…

**嶋崎**：驚きですか。

**松前**：新しい発見だったというか、そういう気はしています。でも、今日、野坂さんの話とか、川島先生のお話しをお伺いして、私自身も、実は、震災のあと、ちょっと、三陸で調査をさせてもらったんですけども、先ほど、こう、キレイな面だけって話も出てきましたけども、引きずられていたかなって、改めて、いま、反省したんですね。で、調査法の話に戻すと、人類学で言えば、すごく重視しているのは、生活者としてまではいかないけれども、やっぱり、参与観察っていうのは、すごく大事にしている、それは、なぜかって言うと、野坂さんのお話しでも出てきましたけど、口で言うことと、やることって、やっぱり違う…。 さっきの話で、競争、個人事業主だって言いながら、協力してみたりとか、そういう、口で言うことと、やることが違うっていう、そこを、やはり暮らしにかかわらせてもらいながら見ていくっていうような、そこが、たぶん、人類学のフィールドワークの肝(キモ)だと思っていて、いろんなことを、自分がなにか思い込みで見ていることの、見つめ直しのきっかけにもなるなとはいつも思っています。一方で、今日、私が、ちょっと「キレイごと」に引きずられたかなと、反省したように、こうやって情報共有をするとか、そういうところをきっかけに、お互いに見えてくるものがあるっていう、それが大事だなと、ほんとに感想なんですけれども、今日、改めて感じたというところがありました。

それから、もうひとつ、今日、ずっとアーカイブのお話し聞いていて、いろいろ出てきた話で言うと、まさにおカネに余裕があればだと思いうんですけど、このプロジェクトをさらに、こう、一步引いて、記録して…。 そのプロセスも、コンフリクトも含めて、記録するようなことがあったら、たぶん、一番いいんだろうなというようなことも、ちょっと思っておりました。いろんな意味で、勉強になりました。ありがとうございます。

**中澤**：時間もだいぶ過ぎていきますし、いま Concluding Remarks として纏めて頂いたので、嶋崎さんにお返しします。

**嶋崎**：ありがとうございました。予想以上に刺激的な2時間を過ごすことができました。また、それぞれが、課題を持ちましたので、また、機会がありましたら、次のバージョンをやらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

以上